横浜文化論

失なわれたものを求めて

特集 11

渡部 允
＜神奈川新聞記者＞

1

経済と都市の発展が，逆に市民生活をおびやかそうとしている現実をどう考えたらよいのだろうか。高度成長政策の推進に伴って，大都市をはじめ，全国的に過密化，工業による公害，交通戦争，生活環境の悪化など，都市の病理現象がひろがっている。都市の発展のために誘致した工業に，こんどは人間が追い出されるという珍現象さえみせている。まさに，大都市は〝ご臨終〟状態というところだ。

人間不在の都市，そこには文化といえるものがあるのだろうか。新しい文化を創造し得る余地が残されているのだろうか。四日市市とはいわないまでも，横浜における都市の病理現象もかなり進んでいることは否定できない。公害，人口の社会増，交通の混雑，住宅問題など。では，横浜に文化があるのだろうか。

2

幕末，すでに人口100万人を越えていた東京にくらべ，開港前の横浜は，戸数わずかに87戸の寒村にすぎなかった。「神が村をつくり，人は町をつくった」ということばがあるが，それはまさに神がつくったといえる程の横浜村であったのだろう。住民の連帯意識は強く，そこには土のにおいがしみ込んだ土着の〝横浜文化〟が存在したのではあるまいか。しかし，開港後，蚕糸の積み出し港として発展すると，その産地である甲州，上州，信州などとの人的・経済的交流が高まり，加えて〝異人さん〟の居留地が置かれ，外国商社の経済支配が強まると，もう全く異質な横浜が建設され，日本の中の外国都市と化した。人類は神から独立して町をつくったおかげで，今日の繁栄をかちとった，といわれる。当時は，繁栄への道をばく進する姿そのものが，日本の中の横浜であったにちがいない。中世のヨーロッパ人が，封建領主や僧侶などの特権階級から逃れて自由都市をつくったように，横浜は自由都市的ふんいきがあふれていたのだろう。そして多分に植民地的ふんいきも。こうした中で，当時の市民は〝舶来〟の文化を〝ザンギリ頭〟の中へ吸引していった。

人口増もいちじるしく，明治元年＜1868年＞には2万人，市政が施行された22年＜1889年＞には，12万人にも達した。すでに外人宣教師による女子教育も始められ＜1866年＞，月2回の新聞も発行されていた＜1864年＞。横浜は東京に対し，ひとつの独立した都市を形成していた。土くさい横浜古来の文化は，異人さんを含め急増した人口と，旺盛な外国文化の輸入の前にその影を薄めていったのだろう。

3

都市への人口集中は，当時も現在も変らない。開港，外国商社を中心とした資本の集中集積は，大量の労働者の集中をよんだであろう。こういった都市における人口集中の「表面的理由」のほか

に，経済外的な「裏面的理由」もある。都会には，生産的魅力のほかに，人生を謳歌できる享楽的，文化創造的な消費生活など，社会的魅力が豊富にある。つまり，レジャーの魅力，生活の便利，結婚や就学の機会，享楽生活，文化生活，流行などだ。これらは都市への人口集中要因の，都市の側での吸引要因といえる。

当時の横浜は，スーパーマーケットの商品棚のように，豊富な，物珍しい舶来文化にあふれていた時代だ。現在の東京都以上に，都市としての吸引要因は大きかったにちがいない。これに対し，家，隣保社会，封建支配，地元の圧力といった地域からの解放，貧困，宗教，身分制，古いモラルといった社会からの解放，因習，伝統，しきたりといった歴史からの解放，自然からの解放など〝人間解放〟が地方の側の〝押し出し要因〟となる。

大都会で生活している人は，一度家を出たら〝逢う人はすべて他人〟だ。お互いが，どこのだれだかわからない。群衆の中では，お互いに平等の人間として扱われる。いなかの村や町のように，近所の人からその行動を監視されることがない。都会の〝無名性の魅力〟だ。そこにプライバシーが生れる。自由，平等の魅力が生れる。

4

ところが，この〝無名性の魅力〟は，その都市に土着した文化とはそぐわない。いま，横浜にも東京をはみ出した人たちが，ベッドを求めてやってくる。彼らは「東京都民的市民」といえる。彼らの目は東京へ向けられ，地元の行政には興味がない，新聞は都内版を配達しろと要求し，県議や市議の選挙よりも，参院議員の選挙により大きな関心を寄せる。

こうしたエリート意識を持った〝異人さん〟の増加は，在来文化の推進者である地域社会の指導者＝旧中間層と反撥する。かつて開港前の文化を，舶来文化が衰微させたごとく「都民的横浜市民」の出現は，地域社会の文化を薄めてゆく。いく度かの変貌をへて，巨大な横浜を形成してきた過程には，こういった〝外敵〟の攻撃が絶え間なく続いた。すでに，文明開化時代に吸引したザンギリ頭的な舶来文化すら形が残っていないのは，そのためではなかったろうか。かつての横浜は，日本へ西洋文明を紹介した基地であり，セールスマン的役割を演じたにすぎないのではなかろうか。

一方，横浜の海岸線は埋め立てに次ぐ埋め立てで形が変えられ，新しい工業地帯は，いまなおつくられようとしている。資本の集中集積はますます高まり，そしてまた労働者を大量によぶ。都市へ集中した無一物の労働者は，そのまま商品消費者となり，都市は巨大な消費市場となって，新しい資本を誘う。都市の内部構造はますます複雑となり，そこから発生する都市問題は，より複雑さをきわめるようになる。

5

現在，自治体をめぐる地域的な，日常的な市民運動だけをみても，公共料金値上げ反対など経済的な要求や，汚職などをめぐる政治的要求，公害問題をはじめ，清掃，し尿など生活権の要求，道路や保育所など公共施設をめぐる市民権を主張した要求など，多種多様である。しかも都市化の傾向が強まるのに比例し，全国各地でいちじるしくふえてきている。

これらは，従来の地域社会や「都民的市民」も含め，全く新しい地域社会から盛り上がっている。市民は自己の生活と権利を守るために，各種各様

の組織と運動による自治体への要求や，抗議を続けている。これは高度成長政策がつくり出した，新しい地域社会＝都市化の中で生きる住民の，自衛力のあらわれではなかろうか。

元来，都市は因習とか伝統とかよりも，より多くの人間のため，が強調される社会だ。人間の自由や，権利が，何よりも尊ばれねばならない。都市は，人間の〝自由と権利の誕生の場〟ともいわれる。都市には，人間尊重の精神が満ちていなければならない。人間と人間性の復活，都市にいま必要なものはこれではなかろうか。人間喪失の都市に，文化の芽生える種があるだろうか。そしてこれからの文化は，広域的な社会の中から，そこに住む多くの市民の中からつくられてゆくのではあるまいか。住民運動も市民のつくりだしたひとつの〝文化〟といえないだろうか。

横浜文化論

よそ者のみた横浜文化論

特集 12

辻村 明

＜東大新聞研究所助教授＞

1――――まえがき

社会の近代化とともに，地方文化は崩壊しつつあるようにみえる。そしてそれはやむをえない時代の趨勢だとして，これを承認する立場と，いやそれが時代の趨勢だからこそ，何とかそれに抵抗して，地方文化の保存に努力しなければならないという立場とがある。私は結論的にいって，後者の立場に加担するのだが，それにはいろいろの理由があげられる。生まれ故郷である浜松という土地に愛着をもっているという個人的な理由もあるし，居住地への愛着や定着の喪失が現代人の大きな特徴であり，こうした「根無し草」が大量に作り出されていることが，現代大衆社会の最大の病理だという社会学的な診断も含まれている。しかしいずれにしろこうした立場は，時代の流れに逆らうのだから，現実的にはどうしても弱い立場に立たされる。最近ＮＨＫでも，「ローカル番組の充実」という基本的な問題が課題にされ，私もその研究に参加しているが，地方文化保存論の立場から，「放送と地域性＜ローカリティ＞」＜ＮＨＫ『放送文化』1965年10月号および11月号＞について書いたところ，非常に多くの反論が寄せられた。そして反論の骨子は，要するに私の立場は時代の流れを無視するアナクロニズムだというので